空になる音

天啓

駆け込むようにして、電車に乗り込む。

雨傘の代わりにしていた新聞はインクが染みて、もう読めるようなものではなかった。突然雨は降り、気温と合わさり、不愉快な湿った空気が体中にこびり付いている。車内の天井につけられた扇風機が送る温い風すらも、心地よい。相変わらず阿呆のように暑い日々が続き、誰もが家でだれているせいか、突然雨が降って人々が雨宿りでもしているせいか、人々が出社するような時間をすぎたせいか、それともこの路線はいつもこんなものなのだろうか。車両の中にはちらほらと数えるほどしか人は乗っておらず、長いシートに対して一人か二人くらいしか座っていなかった。適当にシートの端へと座り、もう読むことのできなくなった新聞を適当に畳み、荷物置きの網に放る。手に持っていたコーラのプルタブを開け、一気に口の中へと注ぐ、中で炭酸が弾け、コーラの冷たさが体の中に染み渡り、ようやく一息をついた。

鞄の中を漁り、携帯ラジオを取り出し、イヤフォンを右耳へと差し込み、ラジオのダイアルを回す。普段合わせていた周波数では、ここらでは合わないようだ。適当にダイアルを回しみるが、上手くあってくれない。少しばかり苛立ちながらグルグルと回していく。何周か回したような気がしたが、ようやく一つの局にあった。掠れたような、ノイズの混じった声が聞こえてくる。ダイアルを少しずつズラし、右耳を澄ますと、ヒットやら、ピッチャー、バッターなどという単語が聞こえてくる。どうやら野球中継をしているようだ。そういえば、ちょうど甲子園の季節だったかと思い起こし、ノイズ混じりの声を耳にしながら、座席に深く腰掛け、目を瞑る。そうか、もう甲子園が始まる季節だったのかと思い馳せようとするが、最近あまり新聞なども読む暇もなくどの高校が強いのか、地元のどの高校が出場しているのかということも知らなかった。だから、目を瞑った。わからないまま、ただ高校野球の試合の中継を聞き、そしていつしか眠っていた。

ぴんひゃらほん、と聞こえた気がした。随分と長い間寝てしまったような気がした。深い眠りから突然揺さぶ

られて起こされたような目覚め。そして、寝ぼけた頭にぴんひゃらんほん、そう聞こえる。一体何の音なのだろうかと、耳を澄ますとテンポよく、ぴんひゃらほん、ぴんひゃらほん。意味もなく、ただ軽快にぴんひゃらほん、ぴんひゃらほん、ぴんひゃらほんと聞こえてくる。徐々に覚醒していく頭、周囲を慌てて見渡す。線路の付近は雑木林に囲まれていて、ここが一体どこなのかわからない。ゆっくりと頭の中が覚醒していく、右耳の中を圧迫する何かがあったような気がして、手で触るとそこにはイヤフォンが入っていた。そう携帯ラジオのイヤフォンだ。一体全体、どの局がこんな妙ちきりんな音を流しているのだろうか、ポケットの中からラジオを取り出し、見ると、先程と同じ局のままになっていた。ダイアルをグルグルとまた回す、しかし一向にぴんひゃらほん、ぴんひゃらほんという音は変わらず、頭の中で響き続けている。そして、イヤフォンを引張り、取って、ようやく気がついた。ぴんひゃらほん、ぴんひゃらほん、ピンヒャラホン、そう音は鳴り続け、そして頭の中へと響き続けているということに。

周囲を見渡し、一体どこから流れてくる音なのか。ピンヒャラホン、ピンヒャラホンと鳴り続ける音は一向に止む気配はなく、徐々に徐々に、音は大きくなっていく。ピンヒャラホン、ピンヒャラホン。車両を見渡すが、誰も乗っていなかった。車窓には大粒の雨がぶち当たり、水滴の先に見える景色は相変わらずの雑木林だった。乗車したときよりも、雨足は強くなり大粒の水滴が、木々の葉にぶつかり、葉がしなだれて、地面へと落ちて行く。窓の外の風景は葉がしなだれ、また別の葉が重なる。緑と緑が重なりあい、林の奥は暗い影が立ち込めていた。真っ暗で、奥に誰がいるのか、何があるのか、わからない、ただただ雑木林が線路に沿って、延々と続き、雨が振り続ける。

頭の中にはピンヒャラホン、ピンヒャラホン。雨粒が窓に叩きつけられ、ピンヒャラホン、ピンヒャラホンと。どこを向こうとも、見えるのは人気のない雑木林が続き、どこを向こうとも耳に響き続けるのはピンヒャラホン、ピンヒャラホン。

いったい、どれくらい私は居眠りしてしまったのだろうか。周囲の風景をいくら見ても、ここがどこかはわかるはずもなく、電車の中に掲げられた路線図を見ても、今電車がどこを走っているのかわかるはずもなかった。

腕時計を見て、呆然とした私の頭の中に、ピンヒャラホンピンヒャラホンと鳴り続ける。いつも乗っている電車よりもノロノロと電車は走り続け、雑木林は続き、その端は見えず、駅のホームはまだ見えて来なかった。そして、徐々にピンヒャラホン、ピンヒャラホンという音はテンポを早めながら、響き渡るピンヒャラホンは徐々に大きくなっていた。

ピンヒャラホン、ピンヒャラホン、間を空けることももなく鳴り続ける音。周囲を見渡すことも諦め、予定の時間もとうに過ぎている、一体次の駅はいつ着くのか、ここから帰ることはできるのだろうか、様々なことが心の中を乱しながらも、ピンヒャラホン、ピンヒャラホンと、テンポよく、少しずつ速くなりながらピンヒャラホン、ピンヒャラホン、ピンヒャラホンと聞こえている。呆然としている私は天を仰ぎ、視線の先には低く、電車の天井があるだけだった。ただ、ピンヒャラホン、ピンヒャラホンと徐々に大きくなる音だけが、頭の中を占めていった。音は増大していき、そしてテンポは速くなっていく。電車のスピードは一定のまま、ノロノロと走り続けている。電車のエンジンが微かに掻き鳴らす音はいつのまにか、ピンヒャラホン、ピンヒャラホンという音に掻き消され、そうやって頭の中はピンヒャラホン、ピンヒャラホンと。音がすべてのものを締め出し、そしてピンヒャラホン、ピンヒャラホンと。もうそれだけしか聞こえなくなっていった、ピンヒャラホン、ピンヒャラホンと。

体から力が抜け果て、呆然と視界に映っていた天井が少し横にずれ、併せて体が横に少し揺れた。ノロノロと走り続けていたはずの電車が一層と速度を落とし、そして速度が無くなり、停車した。自分の後ろには、相変わらずの雑木林が止まって視界に映った。もう雨はすっかり止んでいた。古く寂れた駅のホーム、一点の晴れ間の中、一人の少女がいた。前に向けた視線と彼女の視線が合った。だから、ピンヒャラホン、ピンヒャラホンという音は頭の中でより一層と大きく鳴り響き、ピンヒャラホン、ピンヒャラホンと絶え間なく鳴り響き。だから、私は駅のホームへと降り立つ。天気は晴れ上がり、雑木林から影が消え失せ、私の隣に立つ少女は微笑んでいた。